自由を宝とする方法

karinomaki

はじめに

カントは実践理性批判において、自由を「躓きの石」と言っています。人間の自然な本性が邪魔して、自由な状態に置かれても、道徳が成立しにくいからです。カントにとっては、本当の道徳は、厳しく自分を律する自由の中のものなのです。それでは、躓きの石は、ずっと人間の正しい自由を邪魔し続けるのでしょうか。この文章で、自由の本当の姿を探ってみたいと思います。

自由

心が自由であるとはどういうことなのでしょうか。例えば、自分のやりたいようにだけ生きて、心に思ったことを全て実行していくのが「自由」ならば、この世界は犯罪だらけになってしまいます。だから法律があるのですが、法律だけで人をしばることは哲学的ではありません。哲学は心の在り方を探るものだからです。
カントはフランス革命の時代のドイツにいました。ドイツでは封建的な状態が続いていました。外面的な自由はなかったのです。そのため、カントは「内面の自由」を探りました。その時にカントが重視したのが、「心に響く、良心の声」です。

例えば、嘘をつけば自分にとって有利になる方法がある時、心の中に、「その方法をとってはいけない。自分にとって不利でも正直でいないといけない。」という、良心の声が響きます。その時、人は「自愛」を越えて道徳的になっているのです。しかし、嘘をついたことが全くない人は存在するのでしょうか。全くずるくない人間は存在するのでしょうか。

「宙に浮かんだ自由」

私はカントの実践理性批判で書かれている、道徳が成立する正しい自由を、天上からの美しい声につりあげられる、宙に浮いたものとイメージすることがあります。これは、決して正しい解釈ではないのですが、人間の本性という、下からのどろどろしたものから、完全に離脱するために、正しい自由は浮かんだものでないといけないから、そうイメージしてしまうのかもしれません。しかし、そんな簡単に片付けてしまう問題にしてはいけないとわかっています。天からの声のみに頼るのは哲学ではありません。そのために、成立しにくい自由をしっかり哲学してみるつもりです。

自由は決して宙に浮かんだものではない。なぜなら、もしそうならば、天からの神の声に頼って生きていくことになってしまいます。しかし、自由を哲学的に考えることを徹底すれば、自由は人間の側に引き寄せられて、人間のかけがえのない宝となるはずです。それが、カントの実践理性批判で書かれていると思うのです。この文章では、「宙に浮かんだものではない」自由を、美しい宝として表してみたいと思います。

自由を磨く

人が努力するのは、自由という宝を磨くためだと言っていいと思います。しかし、常に自愛が邪魔をします。特に、もし努力するための何かがなかったら、この自愛は、遠慮なく人を誘惑してくるのです。例えば、努力するということを、一本の柱を立てていくことと考えれば、「上る」という目的ができるので、自愛はあまり寄り付きません。あまり楽をすることを考えず、精進できます。しかし、カントが実践理性批判で繰り返し書いていることなのですが、人は「幸福」になりたい生き物です。もし、自分を絶対に幸せにしてくれる宝石があれば、私も、買いたいという誘惑にかられるような気がします。何も苦しまずに幸せなところにいたいと思う気持ちも、もちろんあります。しかし、それでは本当の自由は磨かれないのです。なぜなら、本当の自由は、自分を律することのできる人にしか得られないからなのです。

自由は躓きの石

先ほど、正しい自由は、人間の本性が邪魔して成立しにくいと書きました。このことをカントは「躓きの石」と言っているのですが、自由は芸術家にとってなくてはならないものです。モーツァルトは心が自由であったから、天上の音楽を曲にできたのではないかと思います。どうして、芸術家にとってなくてはならないものが、哲学的に「躓きの石」とい言われるのでしょうか。それは、人間の、「幸福を得ようとする欲望」のせいです。「自愛」と言われるものです。もし、モーツァルトが自己満足のためだけに曲を作っていたなら、あのようにたくさんの人を感動させる曲はつくれなかったでしょう。自愛をこえたところに、本当の自由は存在するのです。

自由は、その価値を知っている人にとってしか、本当の宝にはなりません。そのためには、自分を律することを知らないといけないのです。自分を愛し、可愛がりすぎていると、自由は価値をなくしてしまうのです。その難しさを、カントは「躓きの石」と言ったのかもしれません。

定言命法と仮言命法

「定言命法」「仮言命法」という言葉があります。カントの倫理学における言葉です。簡単に言えば、定言命法とは、「とにかく～せよ」と無条件に命じることであり、仮言命法とは、「～を望むなら、・・・せよ」と、条件付きで命じることです。カントは、真の道徳とは定言命法のことであると言い、仮言命法を、幸福になりたいためのものとして道徳的でないとしています。
定言命法をカントは次のように表現しています。
「汝の意志の格率が常に同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ」

「定言命法」は、 自分を律する・・・そして、自愛を乗り越え**て成されるものであり、「仮言命法」という、「自分の幸福を求め、期待して何かをすること」ではないのです。**
私は先ほど、自由を「宙に浮かんだもの」と書いてしまったのですが、この雑な言い方の中に、「定言命法」へのイメージがありました。「何がなくてもこうすべし。」という、心の中の良心の声を、どう書けばいいのかわからなかったのです。しかし、実際は「宙に浮かんだもの」などではなく、大きく自分を乗り越えて成立するものです。躓きの石は、躓くのではなく、何とかして越えるべきですね。

「批判」の意味

良心の声という、天につらぬくような、大切な声を、どう生きれば手にしやすいか・・・心が美しいだけでは足りないと思うのです。カントは実践理性批判で、幸福になりたいという自愛を繰り返し批判しています。自愛は、たとえ心が美しくても、越えることは難しいと思うのです。
カントは三つの批判書のあとの、「単なる理性の限界内の宗教」という著書で、宗教批判を展開していますが、カントのしたかったことは、宗教を全て批判することではありません。カントにとって「批判」とは、「批判することで救い上げる」という意味であるはずなのです。私も宗教が正しいものであると思っています。しかし、心の美しさを、カントがどう考えているか・・・人間の本性である、「人はどうなっても自分は幸せになりたい」という、どろどろしたものに打ち勝って、初めて良心の声である「定言命法」が成立すると考えているのです。もし、自由が、私が雑に表現した、「宙に浮かんだもの」でしかないのなら、心の美しささえあれば、人は道徳的になれるでしょう。しかし、カントが「単なる理性の限界内の宗教」で主に書いていることは、人間の本性を悪としたうえで、批判的に啓示宗教の可能性を探ることです。下からの積み上げなのです。宗教を、たった一つ絶対的なものと考え、その教えを自分の血肉になっていない状態で鵜呑みにしては、やはり、その道徳（自由）は「宙に浮かんだもの」でしかありません。

三大批判書の柱

ではどうすれば、本当に実のある自由をえられるのか・・・私は自由を、宙に浮かんだものとしてとらえたくないのです。むしろ、批判哲学のように、地からのしっかりした柱に立脚するものにしてこそ、自由は人間の宝となるはずです。そのことを分析するために、純粋理性批判、実践理性批判、判断力批判について書いてみたいと思います。
純粋理性批判は、主に自然認識について書かれたものであり、人間がこの世界に向かって何を認識するかを書いています。おおざっぱにとらえると、この世界に対峙する人間という、「土台」なのです。純粋理性批判では、基本的に生きている限り、この世界を突き抜けることはできないとされています。しかし、可能な方法があるのです。それが、道徳と芸術です。道徳について書いた実践理性批判では、自由の成立こそが、神へ届く正しい心の在り方です。そして、判断力批判とは、自然を越える、超自然的なものを書いた著書です。つまり、芸術によって、人はこの世界を越えることができるのです。
先ほど、モーツァルトについて書きました。心が自由であったから天上の音楽を作曲できたのではないかと。この「自由」は、芸術には大切なものであり、美しいものですが、哲学的に考えると、「躓きの石」となってしまいます。人間の本性であるどろどろした感情・・・人を押しのけても幸せになりたいというエゴと向き合い、それに打ち勝って「定言命法」という良心の声を導き出さねばならない。それが、実践理性批判で書かれていることです。そして、実践理性批判は、この世界という、どろどろしたものと対峙して、成立させてこそ、実のある自由が成立するということを書いているととらえてみると、純粋理性批判の成立の上に成り立つのです。
それでは、判断力批判はどこに位置するのでしょうか。実は、判断力批判は、純粋理性批判と実践理性批判の間に位置するのです。私は、何度か「自由は宙に浮かんだもの」という書き方をしましたが、この、「宙」とは、芸術における、「心の自由」なのかもしれません。
芸術によって、自由は、「超自然的」となる・・・すなわち、どろどろした地から始まる、自然認識である純粋理性批判を越えて、実践理性批判でカントが最も書きたかったと思われる、「良心の声」を導く美しい自由へと羽ばたくのです。純粋理性批判→判断力批判（芸術。自由への羽）→実践理性批判（自由の成立）と考えます。モーツァルトの心はきっと、この自由への羽を持っていたのです。

しかし、カントは、哲学者であり、私も哲学者を目指しているので、羽を持たずに、柱を立てたいのかもしれません。 純粋理性批判から始まる三大批判書の柱は、ドロドロしたものと戦い、自由へと羽ばたこうとしながらも、厳しい道徳と向き合って自由を永遠のものにしようとする、何よりもがっしりしたものに感じられます。

自由を宝とするために

自由を磨くには、たくさんの方法があると思います。哲学もそうですし、芸術ももちろんです。何かを大切に思う気持ちが育つのなら、自由は磨かれます。自由とは、心の美しさと正しさで育んでいくものだからです。大切なことは、自由が、天と地をつらぬくということです。天からの美しい声も、自分の醜さと向き合う地との格闘も、両方が必要だと思うのです。カントは、自由を「躓きの石」として、哲学の十字架としましたが、同時にこれを大切にしました。それは、苦しくてやっかいだけど、乗り越えた時に自由は光り輝く宝となると知っていたからだと思うのです。自分の苦しみを「批判哲学」として、正しく向き合ったカントの、「躓きの石」というマイナスイメージの言葉に、くすんでしまいがちな自由を磨いて人生の宝としようとする、カントの哲学を私は感じます。

結びの言葉

カントは実践理性批判の結びに次のように記しています。
「ここに二つの物がある、それは　我々がその物を思念すること長くかつしばしばなるにつれて、常にいや増す新たな感嘆と畏敬の念とをもって我々の心を余すところなく充足する、すなわち私の上なる星をちりばめた空と私のうちなる道徳法則である。私は、この二物を暗黒のなかに閉されたものとして、あるいは超越的なもののうちに隠されたものとして、私の視界のそとに求め、もしくはただ単に推測することを要しない。私は、現にこれを目のあたりに見、この二物のいずれをも、私の実在の意識にそのままじかに連結することができるのである。」

もし、星空の中の神から、ただ美しい声が響いて、その通りに行動すれば正しい自由が成立するのなら、人は苦労して地にたって何かを築こうとしなくなるでしょう。だから、カントは「批判哲学」という、地からの柱を書いて、努力することの大切さを示しているのだと思います。カントにとっては、宗教ですら、批判の対象でした。地から柱を立てて、星へ届こうと必死になって初めて、星空と心の中の道徳が結ばれる。その時、魂は永遠のものとなるにちがいないと、カントは誰より願って、実践理性批判を書いたと思います。